

# 京の遺伝子・職人Ⅱ

暮らしに息づく手工芸

山本良介

*Kyo no Idenishi: Shokunin II Yamamoto Ryosuke Photo Kadoma Miyuki*

暮らしに息づく手工芸

# 京の遺伝子・職人Ⅱ

KYOTO DNA II



9784473040893



1920072018002

ISBN978-4-473-04089-3  
C0072 ¥1800E

定価：本体 1,800円 + 税

写真角間三由樹

過去から現代、  
そして未来へと受け継がれる  
職人たちの「神の手」が  
建物と人を繋いでいる。

# 伝統と 革新の 間はざまで！

山本良介

淡交社

淡交社

- ⑧ 提灯 高橋康二
- ⑨ 金箔押師 藤澤典史
- ⑩ 民族人形師 森小夜子
- ⑪ 京和傘 西堀耕太郎
- ⑫ 団扇 饗庭智之
- ⑬ 鋳 中村佳永
- ⑭ 蒔絵 下出祐太郎
- ⑮ つづれ織 石川公三
- ⑯ 金襴 平居豊一
- ⑰ 京組紐 浅野登巳子
- ⑱ 美術織物 岩間利夫
- ⑲ 漆工芸 杉本晃則
- ⑳ 仏師と截金師 富田珠雲
- ㉑ 水引 大嶋光照
- ㉒ 暖簾 上林勝美

## 京和傘

傘骨のディテールを生かした作品を世界に流しています。かなり反響が聞こえ始めてきました。

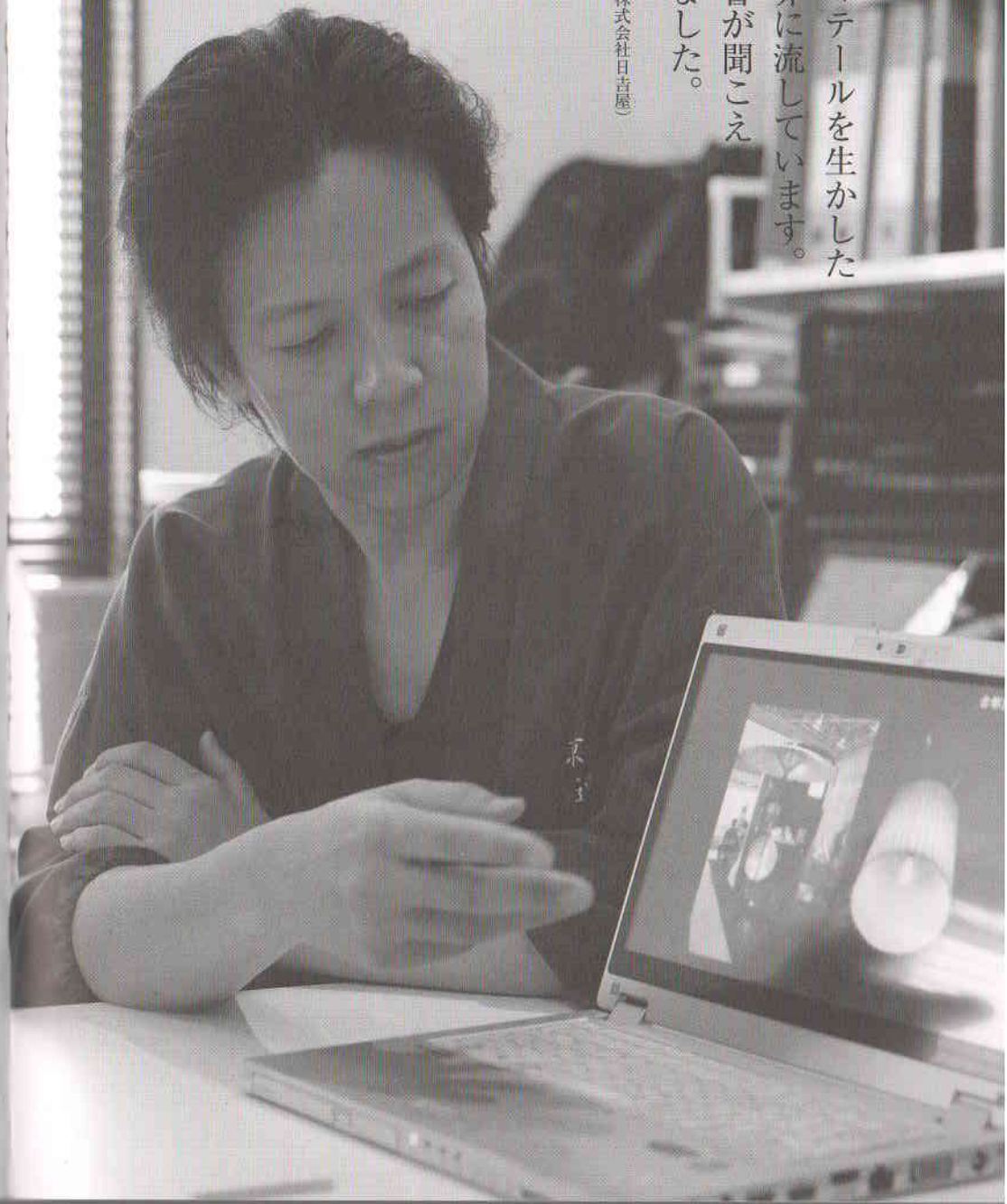
西堀耕太郎 (株式会社日吉屋)

松本光彩

田中元彦

竹澤幸代

呂彦輝



母から譲られた蛇の目傘、我が家に二本ある。僕は京都人だ。

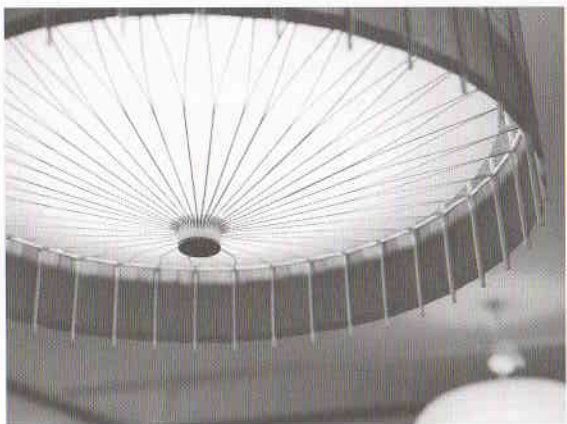
「雨々降れ降れ 母さんが 蛇の目でお迎え うれしいな ピチピチチャプチャプ ランランラン」

(作詞：北原白秋 作曲：中山晋平)

蛇の目傘、家の軒先に入ってすほめる。見事に雨が切れる。つややかな感じ。女性がより美しく見えるから不思議。

雨降りの日は、いつも祖母が幼稚園まで迎えに来てくれた。園の玄関先、蛇の目傘の軍団。「そしたら、また明日ね」「雨に濡れんようにちゃんと蛇の目に入って帰らんやで」と祖母さん。その蛇の目傘、極端に減ってしまっただ。洋傘の普及やバッグサイズの折りたたみのせいだ。

思い出すのは洋画「シエルブルーの雨傘」。監督はジャック・ドゥミで、



# 11

カトリーヌ・ドヌーヴ主演。この女優、めちゃくちゃ美人。しかも流れる音楽はミシェル・ルグラン担当。第十七回カンヌ国際映画祭グランプリ。撮影場所はフランス、ドイツ。当時、洋風かぶれの日本。この映画が蛇の目傘を一気に世の中から追いやってしまった。まさにカトリーヌ・ドヌーヴが全部悪い。

今では京都で唯一残る和傘作りの日吉屋さんを訪れることにした。雨が降っていれば臨場感たっぷりなのだが、なぜかこの日はすっかり晴れ、しかも前日までの雨で蒸し暑い。残念。

おじゃまします。

若い女性に迎えられる。

「どうぞこちらへ」

舗先に「きりっとした京和傘」色とりどりで懐かしい。

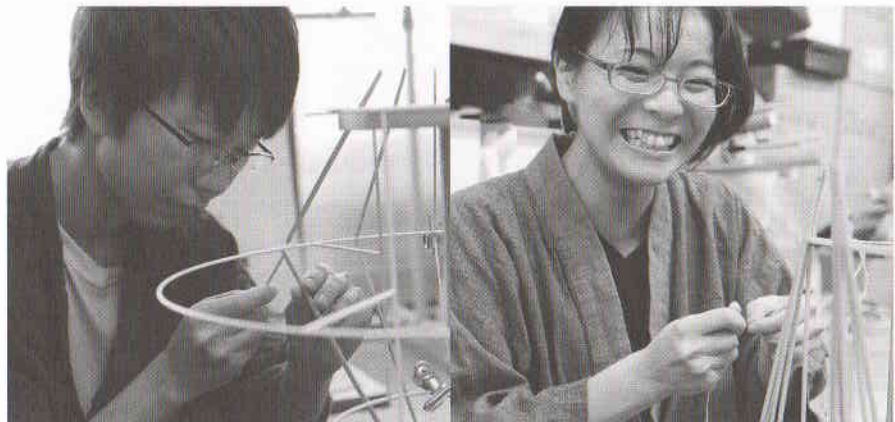
五代目当主西堀耕太郎さん。「ようこそおいでいただきました」

「日吉屋は創業が江戸後期と聞いています。初代墨藏が五条本覚寺で傘屋を始めました。それ以後ずっと傘作り。私が五代目になります」

「京都で作る和傘を『京和傘』と呼びます。時代の変遷で和傘業界は風前の灯ともしびです。とうとう日吉屋だけになってしまいました。三百年の歴史をもつ和傘、その素晴らしい構造と伝統を何としても守り、次の時代へ橋渡ししたいとの思いで日吉屋を引き継ぎました」

建築家である僕が造ってみたいと思う建物、高台寺の傘亭かちかき。傘の骨組みの構造が見事で、傘が作れるのなら建築でも、の思いから造られたのか、いいプロポーション。今は重要文化財。

傘の構造を使って傘以外に何かできないかと試行錯誤しているうちに色々のものが見えてきました。



つい最近、下鴨神社の元神官さんの住まいの改築を頼まれた。サロン棟は傘をイメージして建てたいと思った。四方に延びる丸太の方型構造、いい姿で実現。

理にかなったものになった。

「傘の構造を使って傘以外に何か出来ないかと試行錯誤しているうちに、色々のものが見えてきました。この映像を見てもらえますか」

傘骨をイメージした照明器具が次から次へと。ほう。

「傘は非常に安定しています。この技法を生かしたいと考えました」  
ふーむ。

「和傘はかつての勢いがなくなり斜陽産業です。しかしこの傘で育った僕達はすぐれた骨の技術を持っています。



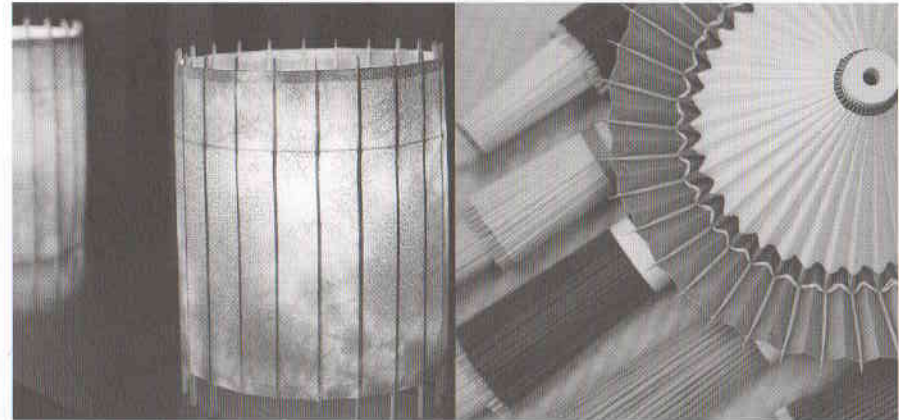
これ以上の技術は他にはありません。何とかしたい、が私の願いです」

傘が照明器具になりましたか。苦境に立つといいものが生まれますねえ。「今まで順風満帆できていましたから、何も考えず傘を作っていたら良かったのですが。傘の良さをどこかに置き忘れてしまったようです」

「僕は日吉屋の娘を嫁にもらいました。僕が五代目をやるということになって『傘の勉強』。しかも日吉屋は風前の灯。何とかしたいとの思いから……。苦しむと良い考えが見えることがわかりました」

僕の建築も同じことで、一時期、京町家は多くが解体、撤去。日本の建築どこへやら……。それが今、人の心が木の香り、木の柔らかさ、手触り、「やっぱり木や」。

えてきました。日本、京物なのか、あるいは傘の持つ特殊構造美に対する可能性なのか……。かなり反響が聞こえ始めてきました。特にヨーロッパの方々からですねえ  
「でも、本業の京和傘、何とかしたいですねえ。『日本の原点、蛇の日傘』その拡販ですね。日吉屋は傘が生命ですから」  
「御陰様で茶道家元にかわいがってもらっていますし、京織の方々にも先ほど申しましたホームページは国外特に欧州の方の反応もいいですね」  
「日本人は不思議な人種で、外国から逆発信されると振り返る習性があります。それが原因かもしれませんが、おもしろいことによく日本各地に伝わる伝統芸能の小道具類や、修理など、少し注文が増えつつあります」  
「京都の伝統行事である山鉾の巡行で、雨の日に洋傘をさしているなんて



時代は繰り返すのですが、苦境に立つと日本建築の中に新しい息吹が芽生えます。僕はその典型的な建築家で、「どうすればこの時代に」が常に頭にありました。三十二歳頃から数寄屋建築に走りました。約四十年、苦しみ悩みました。そんなときこそ良いアイデアが湧くものです。悩み苦しむことから新しい伝統が生まれます。

京和傘は日本の代表的な風物を世に与えたものです。しかも人々の頭の上にかざすもの。値打ちが違います。傘屋さんが次の時代を見据える。悩んで悩んで当然ですよ。

「いや、全くその通りで、ここには非常にいい資料と材料と技が山のようにありますから。今は二つに分けています。一方は本来の傘作り、もう一方はこのアイデアを生かして。二本柱を立てました」

「それと海外からの問い合わせが増

もつての他。しかも百円ビニール傘ですから話になりません。山鉾保存会の人達に訴えて京都は京傘で、と言わねばなりません」

その通りですね。京都の行政も伝統とか京の風物とか盛んに言っているけれどその詳細がわかっていない。この本にチョット書いときますわ。「京都は京都らしく京傘を守れと」

「製作場を見て下さい」

それが今日の目的。作業工程見学開始。

やってるやってる。きれいですねえ。これ何？

「傘の骨を取り付けるものです。僕は轆轤わづらと言ってます」

これは工芸品ですねえ。



「もうこれを作ってくれる職人も少なくなつて困っているところですよ」

和紙が張り上がった頂点の雨漏れ防止の傘の傘。

この紙は？

「カッパです。これが勝負で、このカッパをおろそかにすると雨が漏れま

す」  
軸が組み立てられた接点、糸でかなり締め上げられているけれど？

「下車しとこと言いまして骨のズレをしつかり止めます」

これはデザイン物、美しいですね。僕は傘作りの中で一番気に入りましたよ。

構造美満点で、しかも極めつけの京の技を見ているようで実に美しい。

若い女性の職方、丁寧な仕事振り、これがなんとも楽しそう。整理整頓された清潔な仕事場。あの片隅でもこち

所、一番いいのは必ず存在するお巡りさんの駐在所に京和傘を置いて、百円でも良い、二百円ならなお良し。リースして下さい。持ち帰りはダメ、行く先々の駐在所で必ず返還、京の町中蛇の目傘の渦。「シエルブルーの雨傘」などには絶対負けない。碁盤こぼんの目の通り、蛇の目傘のオンパレード。蛇の目傘たった一本が、より一層、京都を造つてくれる。これぞ観光都市京都である。

五代目西堀耕太郎さん、実に楽しかった。京傘、何とか持ちこたえて傘屋さんの復権を願いたい。京傘を失ってはいけない。より一層のアイデア捻出、復考・新考を願って。頼りにしています。

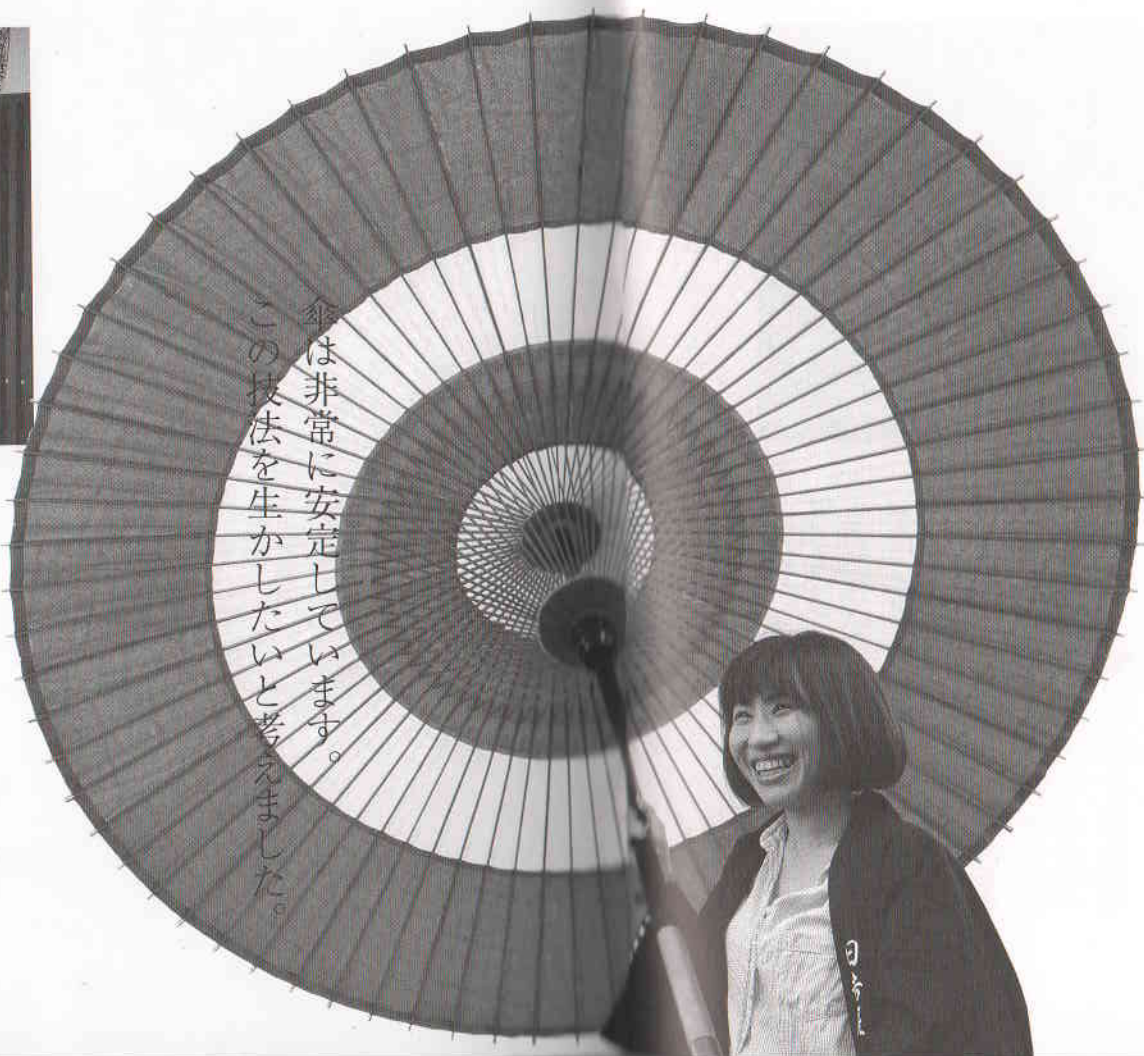
ありがとうございました。



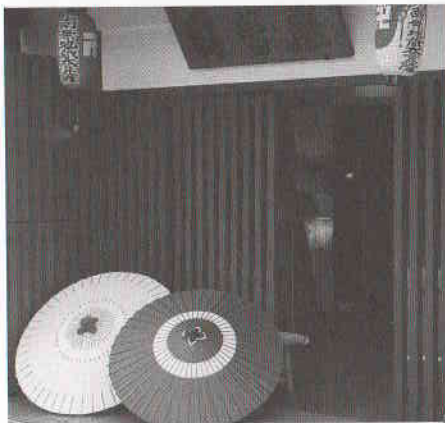
らでも真剣な目をして傘作りに専念していた。清々しい気分を取材を終えた。

### 後記

近頃どういふ訳か、異常と思える程の京の観光客。年間五〇〇万人も受け入れているとのこと。その人達、雨の日どうしているのだろう。きつとコンビニに入ってビニール傘を買うだろう。京都市さんに御願ひ。町の各



傘は非常に安定しています。  
この技法を生かしたいと考えました。



株式会社 日吉屋  
京都市上京区寺之内通堀川東入ル百々町 546  
TEL. 075-441-6644